

「深読み」を排斥する

(ヨハネ二〇・三〇、三一)

小野文恵アナの、計算しつくされつつもわざとらしくない驚異の「ボケ」センスによって、わかりやすく、面白いニュース番組に仕上がっていたNHK「週間ニュース深読み」がリニューアル。後任の首藤アナには前任者との比較に惑わされず独自の道を進み、これからも様々な時事問題に深く切り込んで欲しいと願ってやまない。しかしよくよく考えると「深読み」とは本来そんなに良い意味で用いられる言葉ではない。辞書などにも「言外の意味を必要以上に深く解釈すること」と定義されているくらいなのだ。

聖書を読むことは素晴らしいことであるが過剰な「深読み」は避けられねばならない。今朝はヨハネ福音書の著作目的が書かれている二節を取り上げ、ヨハネ福音書の性質と中心的主張、そして目的について学んでみたい。

一、全部を書いてはいない

この福音書の性質は一言でいえばイエスの生涯の完全記録ではないと

いうことである。それは三〇節のみならず、二一章二五節にも「もしそれをいちいち書き記すなら、世界も書かれた書物を入れることが出来まいと思う」と言われている程である。つまりこの福音書は当然のことながらイエスの生涯の中で著者が必要と思つたものを選択的に記述していることになる。こういうとある人は「こんなものは恣意的だ」というかもしれない。しかしこうした構成や編集がなければそもそも読み物として成り立たない。卑近な例だがテレビの「警察二四時」の類は防犯カメラの定点映像を垂れ流してはいない。むしろ積極的に意図をもって編集をしているが、それを悪いと思う人はいない。福音書記者はイエスの生涯の記録の中から自らの主張が最も伝えられる記事を厳選し、注意深く書いた「良き知らせ」なのだ。

二、イエスは神の子キリスト

ではこの福音書記者の中心的主張とは何か。それは「イエスは神の子キリストである」ということに尽きる。これは教会の中では実に当たり前の帰結なのだが、学問の世界ではこの主張を離れた「史的イエスの探求」ということが延々となされてきた。だがその結果はどうだろう。学者間で何らかの一致を得たのだろうか。否で

ある。そこにあつたのは百花斉放、百家争鳴と言えば聞こえはいいが、要は人の数だけイエス像が出来上がるという、それこそ恣意的としか言いようのないカオスであった。ネガティブな意味での「深読み」の産物である。著者がこの目的で書いたと言っている以上、やはりそれに従ってテキストは読まれるべきであり、だとすればイエスは神の子であり、救い主であるということが浮かび上がってくるような読み方こそ、この福音書に真摯に取り組んだ証なのだ。

三、信じていのちを得るために

よく福音書を「イエス様の伝記」のように位置付ける人がいるが、残念ながらそれは三二節の説明に沿つたものではない。一般的な伝記であれば生涯の記録が時系列で、しかも満遍なく語られるのだが、福音書はそういう書き方ではない。そもそもこの福音書は二一章のうち十章が最後の一週間のこと、また復活後を書いてるのである。なんともアンバランスというほかない。しかしそもそも福音書記者はこれを伝記として記してはいないのだ。むしろその目的は「イエスが神の子キリストであることを、あなたがた（つまり読者）が信じて、いのちを得るため」だと断言している。つまり福音書がこのような書き方になつたのは

読者に信仰の決断を迫るという目的から来た必然的帰結であり、そのような迫りを感じつつ常に読まれるべきものである。そして「たびイエスが神の子キリストであることを信じ、受け入れるなら、その人のうちには「永遠のいのち」が流れるようになるのだ。

* * *

「牧師さん、来てください」の知らせを受け、押つ取り刀で駆け付けた病室には人工呼吸器のアラームがけたたましく鳴り響いていた。「牧師さんが来たよ」というご家族の声にも反応はない。ひるまずに詩篇三三篇を唱え、祈つた。かすかに口が動き脈が戻つた。智子師が手早く讚美歌を家族の方に手渡し、愛唱歌「山路越えて」を歌つた。彼女はかすかに口を動かし、賛美の中で彼女は旅、たつた。その直後、医者が増えて関根泰子姉妹の死は確認され、そしてアラームは止んだ。しかしこれは終わりではない。なぜなら彼女は死に打ち勝つたイエスを神の子、救い主として信じたからである。永遠のいのちの安らぎの中にいる彼女に私たちが「天国行」を願うのは蛇足である。私たちが今成すべきはむしろ彼女の愛したご家族のために心から仕え、救い主イエスを紹介することである。